

11月19日 Reflection3

まず初めに、Amidouさんがディスカッションの進行役となり、グループ1とグループ2で話し合った内容を共有しました。

グループ1からは、「アフリカでの授業研究プロジェクト」の報告が紹介されました。南アフリカの過疎地では、黒人差別によって平等な教育機会を得られない人々がいるという現状があり、この状況を打開するための施策がレッスン・スタディでした。また、グループ1から提示された2つの質問として「どうすればプロジェクトに莫大な予算がつくのか」、「どうすればプロジェクトの持続可能性が得られるのか」が挙げられました。予算と持続可能性については、「レッスン・スタディ」を導入したり、さまざまなアクターと協力したりすることで解決できるという結論が出ました。

グループ2のMarthaさんは、「南アフリカの黒人差別」というテーマで同様の報告をしました。黒人の子どもたちは、自分の可能性に自信が持てず、学習意欲も低いという状況を指摘しました。子どもたちがもっと積極的に学ぶようになるためには、NGOなどとの連携や、家族や親の協力が必要であることが示唆されました。

次に、「教育政策の策定と研究の関係」についての議論が行われました。問題となったのは、政策立案者とステークホルダーとの間のコミュニケーションが不足していることとされていました。例えば、子どもや教師などのニーズを考慮せずにトップダウンで政策を決めてしまうと、政策立案者がいくら良い政策を作ったと自負していても、実践者側は満足しないということです。

様々なステークホルダーを政策立案に巻き込む「参加型アプローチ」については、いくつかの提案がなされました。まず1つ目にステークホルダーと政策立案者とのコミュニケーションの機会、2つ目に実務家、研究者、政策立案者がお互いの機関を行き来するシステムの構築、そして研究に基づくエビデンスの政策立案への応用が挙げられました。

